

核時代の英米文学者

—Hermann Hagedorn, *The Bomb that Fell on America* (一九四六年)の日本語訳(一九五〇年)について

齋藤 一

一 序論

ハーマン・ハゲドーン (Hermann Hagedorn, 一八八二年〜一九六四年)はアメリカの詩人・伝記作家であり、アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトの伝記(一九一八年)で有名であるが、一九四六年に *The Bomb that Fell on America* という叙事詩を発表したことは注目に値する⁽³⁾。その理由は、この詩が、すでに一九四六年(ジョン・ハーシー『ヒロシマ』と同じ年)という時点において、アメリカによる広島市への原子爆弾投下を明確に批判しているからであり、またハーシー『ヒロシマ』の翻訳(一九四九年)に続くように、同じ法政大学出版局から一九五〇年に『アメリカに落ちた爆弾』と題して翻訳出版されているからである⁽²⁾。『ヒロシマ』ほどは知られていないこの作品の簡単な紹介も兼

ねて、三部からなるこの詩の第一部から入江直佑による訳文を少し引用してみたい。なお、旧漢字は新漢字におきかえることとする。

爆弾が広島に落ちた。／忘れはすまい。(第一部第一章、四頁)⁽³⁾

広島に落ちた爆弾はアメリカにも落ちたのだ。(第一部第三章、一一頁)⁽⁴⁾

それは人々に落ちたのだ。／それは人々の身体を溶かしはしなかつたが、／しかし、えらい人、つまらぬ人、全部の人々の何か本質的に大切なものを溶かし去った。／人間と、過去未来とのつながりが、溶け去ったのだ。(第一部第五章、一四頁)⁽⁵⁾

この恐ろしいものを人類にけしかけたのは一体誰だ。／我々も知り、天地も知る。／それはアメリカだ。(中略)このアメリカが、原爆を放つて広島市民十万を殺し、世界の地軸を震撼させたのだ。(第一部第六章、一八頁、二〇頁) ⑥

この詩がアメリカによる広島市への原子爆弾投下の責任をアメリカ人読者に訴えていることは明白であろう。

ここでこの翻訳についても記しておく。『アメリカに落ちた爆弾』は一九五〇年一二年に法政大学出版局より出版された。翻訳者はすでに述べたが入江直祐(一九〇一年〜一九九二年)で、当時は法政大学教授(のち神奈川大学と創価大学)、アルフレッド・テニスン、ウォルター・スコット、ウイリアム・ブレイクなどの訳者として知られていた。興味深いのは、この翻訳には入江による「あとがき」などは掲載されておらず、その代わりに谷本清と相馬雪香の文章が訳文のあとに掲載されていることである。『アメリカに落ちた爆弾』の出版経緯などを記した「あとがき」(一四七〜一五〇頁)は、ハーシー『ヒロシマ』によってもよく知られている谷本清(一九〇九年〜一九八六年)の手になるものであった。さらに、「ハゲドーン氏のこと」(一五一〜一五三頁)という紹介文も掲載されていたが、これは尾崎行雄の三女で、市民団体・NPO法人「難民を助ける会」(一九七九年〜)の設立などで知られる相馬雪香(一九二二年〜二〇〇八年)が執筆したものであった。この翻訳が一九四九年のハーシー『ヒロシマ』の翌年に同じ出版社から出版されたことを考えると、ハゲドーンの詩は、『ヒロ



左が『アメリカに落ちた爆弾』(一九五〇年)表紙。星条旗を模しているのであろう。右はHermann Hagedorn, *The Bomb that Fell on America* (1946, 7th printing)の表紙。右の表紙のキノコ雲の上部にアメリカ合衆国の地図らしきものが描かれていることがわかる(楠田剛士氏からご指摘いただいた)。また、そのキノコ雲を大地からのびた手が握りしめているようにも見える。

シマ」出版の余波の中で、谷本清、相馬雪香、そして法政大学出版局を中心とした人的ネットワークの中で日本社会に翻訳紹介されたと考えて良いだろう。

他方、この長詩は谷本・相馬・法政大学出版局ネットワークとは違う場所でも紹介されていた。英米文学・語学・研究教育者のための雑誌『英語青年』でも紹介されていたのである。一九四九年六月号（第九五巻第六号）に掲載された「英語クラブ」というコラムで、「ふとした機縁で此の書を作者から貰った」（三七頁）という英米文学者・翻訳者の池田義一郎（一八九九年、不明）が、この詩をかなり詳しく紹介しつつ、ハゲドーンに手紙を送ったところ、心に響く手紙だった、目下谷本清氏から翻訳の申し込みがある云々の返事があつたと記している（同上）。また、これは後述するが、当時の池田はハゲドーンの別作品を紹介翻訳していたが、それらの翻訳に付された「著者小伝」では『アメリカに落ちた爆弾』も紹介もしていたのである。つまり谷本・相馬・法大出版局とは別の、池田を介したルートでも、ハゲドーンの長詩は日本に紹介されていたのである。ただし、二つの異なるルートをつなぐキーワードがある。それがM R A (Moral Re-Armament 道德再武装運動) である。

本稿では、これら二つのネットワークに注目し、一九五〇年前後の日本におけるハゲドーン作品の翻訳・受容について基本的な事実を記述し、その翻訳・受容の背後に見えるM R Aの存在を指摘することで、核時代における日本の英米文学者の営為の一端を示すことを狙いとしている。

二 『アメリカに落ちた爆弾』の「著者について」

本稿の「一 序論」において、『アメリカに落ちた原爆』には入江の訳文の他に、谷本の「あとがき」と相馬の「ハゲドーン氏のこと」が掲載されていたことを述べたが、実は他にも掲載されていた文章が複数あつた。その一つに「法政大学出版局」が書き手として記されている「著者について」（二五四～二五五頁）という紹介文がある。これはハゲドーンの経歴と、詩全体のごく簡潔な要約にもなっているので以下に引用し、特に下線部と数字記号で強調している箇所について、以下で補足説明を加えることとする。

著者ハーマン・ハゲドーン氏 (Hermann Hagedorn) は一八八二年ニューヨーク市に生まれ、一九〇七年ハーヴァードを出て外遊、帰国後一時教職にあつたが、その後詩人・小説家・伝記作者として認められ、アメリカ芸術文学協会の会員に推されて今日にいたつている。伝記物で最も広く読まれているのは少年の為に書かれた「シオドア・ローズヴエルト伝」で、最近はアフリカの聖者シュヴァイツァを描いた「荒野の預言者」(Prophet in the Wilderness) を出した。

しかし彼の作品で最も評判になつたのは叙事詩「アメリカに落ちた原爆」(The Bomb that Fell on America) であろう。これは七十七頁に及ぶ長詩で、三部にわかれ、第一部において広島に落ちた爆弾はアメリカにも落ちたと警告し、アメリカの良心の声として、全世界の人々に訴えている「一」。

次いでニュー・メキシコの砂漠でオッペンハイマー博士や

フエルミ博士等の原子学者が多数集まつて、最初の原爆試験が行われる息づまる光景の描写「2」があり、第二部はアメリカの良心を代表する詩人が神と対決する場「3」、第三部は原爆による人類の破滅を救うためには、魂のうちに潜在する原子力以上の力を解放するより外はないと説き、

「原子力は此の世で一番強いか

否、唯一の例外がある

それは人間の魂だ！」

と結んでいる「4」。この叙事詩はアメリカ戦後文学の最も注目すべきものとして、国内に大きな反響を巻き起こし、すでに十版を重ねている。そして著者は今人間の魂の覚醒を全世界に呼びかけて活発な行動を展開している「オクスフォード・グループ」の最も有力なメンバーの一人であり、またM・R・A（道徳復興運動）の熱心な支持者で、本書の冒頭に同運動の主唱者ブックマン博士への献辞が記してある「5」のもそのためである。

なお、本書はハーシー著「ヒロシマ」（米国ノッフ出版社発行、日本語版は法大出版局より発行）の主人公であり翻訳者である谷本清氏が「あとがき」で書いておられる通りの経緯で、著者ハーマン・ハゲドーン氏の特別の好意により出版されたもので、翻訳に際しては訳者の入江法政大学教授、学習院大学教授野上茂吉郎および相馬雪香夫人に一方ならぬお骨折りを頂いた。ちなみに本書の印税は全部日本YMCA同盟並びに広島ピース・センターに寄贈されるものである。

（下線部と数字記号は本稿の筆者（齋藤）によるもの）

第一段落のハゲドーンの略歴について、すでに「1 序論」で記述したとおり、一九六四年に亡くなったことを付け加えておく。

第二段落はハゲドーン作品の要約になっている。ハゲドーン作品の第一部、下線部「1」については、すでに「1 序論」である程度紹介したので、ここでは繰り返さない。下線部「2」の「息づまる光景」については、第一部第九章でハゲドーンは「二十分前」（二六頁）から「カーン」（四六頁）——爆発の瞬間の表現——まで、一分ごとの（最後は一五秒単位での）時報のあとに、マンハッタン計画関係者の原子力へ期待や恐れ言葉などを挿入している。下線部「3」、作品の第二部については、「神」に会いに来た「私」（「アメリカの良心」）に対する「神」の言葉を引用しておきたい。

「私はお前に霊を授けた」と神は叫んだ、「それなのに、下界に下りて手品の種を使えと私に頼むのか。

原子を微塵に破壊した面々は、この私に、雷をひっさげて下界に下りて、核をたたき割っていたら良かったなどと、頼みに来はしなかった。

あの連中は、原子の中に力があることを知り、その力の解放に着手した。

電子を乗越し、核を砕き、使用をまっていた力を解放して、

仕事は済んだ。

彼等は成功し、ニュー・メキシコだけでなく、全世界を震撼した。

人間の霊の中には力がある」と神は云った。

「お前がそれを破壊し解放するならば。

原子力とおなじような力、

原子力よりも強い力、

原子力を統制する力、

それが出来るものは外にない。

唯一つのものを除いては、原爆が最大の力だと云ったが、

その一つのものとは人間の霊だ。

しかし」と神は続けた——満点の星はじつと佇たてまんで聞き澄ましてゐるらしい——

「この力は解放してやらなければ駄目なのだ、丁度、原爆を破壊した連中が原子力を解放したように。

核に包まれたエネルギーを補足するためには、彼らは電子層を乗り越えなければならなかつた。

人間の霊に包まれた力を解放するためには、私は幾多の自我の層を乗り越えなければならぬ。(後略)

(第二部第一章、七二―七三頁)

この引用は第二部におけるハゲドーンのメッセージをかなり明確に伝えている。つまり、マンハッタン計画に関わった人々は「原子力」を解放したが、それより強いものは「人間の霊」である、しかしそれは「幾多の自我の層を乗り越え」なくては解放できないものである、ということである。このメッセージは、この第二

部と次の第三部で変奏されてゆくことになる。

下線部「4」、つまり作品の第三部には、第二部では出てこなかった言葉があることに注目したい。

その時、その刹那、全アメリカの声が、

かすかに、悲しそうに、悩むかのように聞こえてきた、

「もし我々の生命が、頼みになる何かの根拠を持ちさえすれば、あの原爆の処理くらい出来るんだが。」

二

わが身も思い悩み、声を上げて神を呼べば、神は来た。

「神様私に何が出来ましょう、」私は神に訴えた、「誰に何が出来ましょう。」

神は一言、唯一と言、「改変せよ」と云った。

「何故私に、改変せよ、と云われますか。あなたの手に、この手をおあずけした私ですのに。」

「お前の手だけでは不足だ。私はお前の命が欲しい。」

私の身体の中で、何かがいんと冷えた、だが神は微笑した。

「お前たちはみんな同じだ。じたばたするが、

十中八九、悟りが開けて私について来るのだ。

妻君と同じように、お前は大掃除が好きじゃない。

だが、春ともなれば妻君は大掃除をする。お前もやはりそうするだろう。

お前の忿怒、不信、憎悪、卑猥、恐怖を、炉や裏庭でごみ屑を焼くように、焼き捨てるだろう。」

「私の大掃除と、アメリカと何の関係があるのかしら。」

「アメリカといってもそれは人なのだ。お前のような人の集りだ。お前が改変すれば、アメリカも改変するだろう。」

彼らが一とたび改変したら、あの原爆の使い方も解るだろう。」

はるかな星の群の中で、時計のカチカチ鳴る音が聞え、死の神は「……分前、……分前——」と云いつづけた。

(第三部第一章、第二章、九七〜九九頁) ⑥

この引用で特に注目すべき言葉は「改変^{チェンジ}」である。「私」も、「私」のような人々の集団であるアメリカも、作り上げてしまった原子爆弾の対処に苦慮している。そこで必要なのは「改変^{チェンジ}」であり(アメリカの「大掃除」である。そしてその「改変^{チェンジ}」はアメリカのみならず全人類が必要とするものであると説いてゆく。

この詩がアメリカによる広島市への原爆投下を率直に批判し、それを行ったアメリカの責任を明示し、責任者たるアメリカ(そして人類)の精神的変革を求めるものであることは明確である。そして、第二部と第三部で語られる変革(「改変」)への訴えは、「著者について」の引用の下線部「5」で暗示されているように、ハゲドーンも積極的に関わっていたMRAが掲げていたスローガンと関係があると言つてよいだろう。

ここでMRAについて簡単に確認しておくために、『日本大百科全書(ニッポニカ)』電子版の矢澤修次郎による記事を引用する。

MRA運動 道徳再武装 Moral Re-Armament 運動の略。第一次世界大戦後、アメリカの宗教家ブックマンが提唱し、彼の影響下にあつたオックスフォード大学の学生を中心的主体にしたオックスフォード・グループによつて展開された運動であつた。当初は道徳再武装という名称を掲げてはいなかつたが、しだいにその名称を用いるようになった。絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛という四つの信条を掲げて、人種、宗教、階級、国籍を超えた道徳的六合を説く、宗教的、倫理的、精神的色彩の濃い平和運動である。それなるがゆえに、ベトナム戦争を契機として高揚した世界的な反戦平和運動、学生運動に対抗し批判する運動を展開して注目された際には、その保守的な性格も指摘された。二〇〇一年に名称をMRAからIC(イニシアティブス・オブ・チェンジ Initiatives of Change)に変更し、NGOとして、各国支部の運動を束ねるとともに、国際連合や欧州評議会との連携を図つてゐる。⑦

なお、矢澤は「保守的な性格も指摘された」という表現にとどめてはいるが、宮本百合子は「再武装するのは何か——MRAについて(一九五一年)」という文章において、MRAとこの運動に関わる人々について批判している^⑧。宮本によれば、この運動は宗教運動から社会運動へ、具体的には労使協調路線を打ち出したお

かげで、第二次世界大戦中のアメリカで勢力を増したが、ナチス・ドイツの思想と親和的であったことに批判があったこと、戦後はその反共主義が利用されていること、そのような団体の大会に片山哲（元首相、一八八七年～一九七八年）が参加したことは厳しく批判されるべきであるということになる。宮本が触れている片山哲のMRA大会参加は、当時の新聞、例えば一九四九年五月一日付の『朝日新聞』（東京・朝刊、一頁）の「片山委員長へM・R・Aから招聘」という記事に始まる、片山自身の手記も含めた一連の報道で確認できる。また、片山だけではなく、宮本がいうところの「労使協調路線」の延長線上にある日本代表団のスイス訪問については、MRAについての研究書を執筆したダニエル・サツクも記している⁽¹¹⁾。『アメリカに落ちた原爆』の日本語訳が出版された一九五〇年前後の日本においては、少なくとも宮本から批判が出る位にはMRAのことが知られていたばかりか、MRAが日本の超党派的な運動と関係があったということは覚えておきたい。

ここで矢澤の引用に戻るが、この引用で重要なのは、MRAの四つの信条の一つである「絶対無私」と、名称変更後にも引き継がれている「チェンジ」への志向である。「絶対無私」という個人主義への懐疑と、矢澤が言うところの「人種、宗教、階級、国籍を超えた道徳的和合」への訴えは、『アメリカに落ちた原爆』第二部の「人間の霊に包まれた力を解放するためには、私は幾多の自我の層を乗り越えなければならぬ」というセンテンスと呼応するだろう。また、「チェンジ」はこの作品の第三部のキーワードである。ここで、「著者について」の引用の下線部「5」を念頭に置けば、この作品におい

てMRAの思想は重要なものだったと言つてよいだろう⁽¹²⁾。

このことを裏付けるように、「著者について」のみならず、「あとがき」（谷本清）、「ハゲドーン氏のこと」（相馬雪香）のどちらも、ハゲドーンならびにこの作品とMRAとの関係を語っている。

谷本は「あとがき」において、次のように語っている。一九四八年の米国講演旅行の途中、アトランタ市のエモリー大学（谷本の母校）での講演において、聴衆の一人からこの作品を受け取り、これを「真剣な懺悔の心を表した詩」「アメリカの良心の叫び」（二四七頁）と評価して、作者のハゲドーンと文通を始め、翌一九四九年、ニューヨーク市にある「テオドル・ルーズベルト記念館」でヨーロッパ旅行から帰ってきたばかりのハゲドーンと面会したのだが、渡欧の理由について訪ねた谷本に対して、「MRA（道徳復興運動）大会に出席するためであった。」と氏は答えた（二四八頁）という。そして「これでも私の「アメリカに落ちた爆弾」を書いた精神的背景が読めたような気がした」（同上）と明記している。

相馬は、一九三二年にハーヴァード大学でハゲドーンと会った際に「日本の俳句に興味をよせて、十七節の詩を弄しておられた」（二五一頁）こと、そして「凡ての国、凡ての民族、凡ての階級、宗派の違い、など凡ゆる差異をのり越えて世界を一つに、そして真の平和に導こうという、大きなプログラムを掲げて、現在世界の数十カ国に力強く運動を展開しているM・R・Aの精神に共鳴し、その為に働いておられる」（同上）と述べている。さらに相馬は、「最初に「アメリカに落ちた爆弾」が出版されてから四年目に改訂版が出て、第三部は全部書き直されたのだが、その間に著者はスイスに開かれたM・R・Aの世界大会に出席して再度の

深い改変を体験されたのである」(一五二頁)、「この詩を貫く思想は、第三部の終に出てくる「個人の改変^{チェンジ}、絶対の道德標準、そして神の導き」のこの三点を通じて行われる世界の再造である」(一五二～一五三頁)と記して、作者並びに作品とMRAとの関係を強調している。

このように、ハゲドーン『アメリカに落ちた爆弾』は、その作品自体がMRAの影響を強くうけた作品であり、谷本や相馬、そして出版元の法政大学出版局もMRAとの関係を強調していたことは、この作品の日本における受容を考える際に重要な事実であろう。

三 池田義一郎による『アメリカに落ちた爆弾』紹介

以上、この昨品が、谷本・相馬・法政大学出版局ネットワークを経由して、MRAとの関係を強調した上で日本に導入されたことを示したが、すでに「一 序章」でも示したように、池田義一郎によっても紹介された。

池田についての経歴や業績について、そしてハゲドーン作品との関係についてはまだ調査が不十分であるが、現時点でわかっていることを示しておく。まず *emil books* で池田の著作の出版年の古いものから検索すると、L. A. Lyall, *China* の注釈書(一九三九年)、Herbert A. Giles, *The Civilization of China* の注釈書(一九四一年)、Benjamin Franklin, *The Autobiography of Benjamin Franklin* の注釈書(一九四七年)といった書籍を出版していたこと、そしておそらく学習参考書であろう『最新英語総合問題の解き方』(一九四八年)の編者だったことがわかる。

興味深いのは、*emil books* での検索結果によれば一九四九年と一九五〇年に池田が以下の書籍を出版していたことである。

(1) ハーマン・ハーゲドーン『アメリカ人物誌』池田義一郎訳、上下巻(大阪教育図書、一九四九年)⁽¹³⁾

(2) Hermann Hegedorn, *Americans: a book of lives* (introduction and notes by G. Ikeda), Osaka Kyokku Toshu, 1949

(3) 池田義一郎『新しい英語問題の学び方』共栄出版社、一九四九年

(4) ハーマン・ハーゲドーン『アメリカ人群像』池田義一郎訳、上中巻(大阪教育図書、一九五〇年)⁽¹⁴⁾

これら四点のうち、(2)は(1)と(4)の作業の副産物と思われる教科書であり、(3)は英語学習参考書なのでここでは詳述しない。(1)は伝記作家ハゲドーンによる啓蒙的な人物伝であり、「サミュエル・ラングホーン・クレメンズ(マーク・トゥエイン)」、「オリヴァー・ウエンデル・ホームズ」、「トマス・アルヴァ・エヂスン」、「ルーサー・バーバンク」、「ブッカー・T・ワシントン」といった人々の経歴を紹介したものである。(4)も(1)と同様の啓蒙書なので詳細は省略する。

これらの訳書について興味深いことが二点ある。一点目は、これらの訳書の裏表紙には「第一回翻訳許可書」という文字が印刷されていることである。このことは、これらの訳書がGHQの米軍占領下の対日文化政策の中で出版されたということを示している。

二点目は、(1)と(4)のそれぞれに(池田が書いたものかどうか

かはわからない、ほぼ同様の文言と内容からなる)「著者小伝」が掲載されていることである。⁽¹⁵⁾この文章は、ハゲドーン(池田の表記は「ハーゲドーン」)の略歴を示しつつ、ハゲドーンの名声は『アメリカに落ちた原爆』にあること、「此の叙事詩はアメリカ戦後文学の最も注目すべきものとして、国内に大きな反響を巻き起こした」(五頁)こと、そしてハゲドーンが「今人間の魂の覚醒を全世界に呼びかけて活発な行動を見せている」オクスフォード・グループの最も活発なメンバーの一人である(同上)と結んでいることである。この「オクスフォード・グループ」が一九三〇年代後半にMRAと名称を変更するところの、ブックマン率いる運動と深い関係にあることはすでに述べた。つまり、池田は『英語青年』の記事ではMRAのことに触れていないものの、ハゲドーンのアメリカ人物伝三冊の「著者小伝」は、ハゲドーンとMRAの関係に少なくとも間接的には触れているのである。このことは、池田による『アメリカに落ちた原爆』の紹介が、間接的にはあるが、本稿の「二」で論じた谷本・相馬・法政大学出版局による『アメリカに落ちた爆弾』の翻訳紹介と、MRAという一点において共通点があるということを意味する。

四 結論と今後の課題

本稿では、Hermann Hagedorn, *The Bomb that Fell on America* (初版・一九四六年、改訂版一九五〇年)が、アメリカ人による広島市への原爆投下を真正面から批判した作品であり、保守的な政治運動であるMRAとの関わりの中で執筆・加筆されたことを示し

た。そして、この作品が法政大学出版局から『アメリカに落ちた爆弾』として一九五〇年に出版されたこと、さらにはこの翻訳出版とは別に池田によっても紹介されていたことを示した。その際、どちらのルートに関わった人々も、直接的あるいは間接的にハゲドーンの作品をMRAとの関わりにおいて語っていたことを明らかにした。米軍による占領統治の末期に、ハーシー『ヒロシマ』の翻訳出版(一九四九年)に続いて世に出たハゲドーン『アメリカに落ちた爆弾』の日本語訳(一九五〇年)は、作品自体も紹介受容のされ方も、MRAというキリスト教保守派の運動との関係が強かったのである。このことが何を意味するのかについては、機会をあらためて議論することとしたい。

注

- 1 Hermann Hagedorn, *The Bomb that Fell on America*. (California: Pacific Coast Publishing Company, 1946). 本稿で原文を参照するときには、私の手元にある“7th printing”(一九四六年七刷版)を参照した(なお、Hermann Hagedorn, *The Bomb that Fell on America*, new revised edition (New York: Association Press, 1950)という版があり、入江訳はこの一九五〇年版を用いた翻訳だと思われるが、二〇一六年六月三日現在、この版を筆者(齋藤)は精査していないので、別稿にて検討し所見を述べることにしたい)。なお入江訳には、ハゲドーンの「日本語版序文」が掲載されているが、そこには「詩の第一部、第二部、脱稿の後四年を経て書いた新作第三部」(「目次」には一頁とあるが、実際にはノンブルなし)という文言がある。この「新作第三部」を含んだ「一九五〇年版」が単行本の形で出版されたわけである。

2 ハーマン・ハゲドーン『アメリカに落ちた原爆』入江直佑訳、法政大学出版局、一九五〇年。以下本文中の頁番号等はこの版に依るものである。なお一九八六年には同じ出版社、同じ訳者によって改訳が出ている(『アメリカに落ちた原爆』改版、入江直佑訳、法政大学出版局、一九八六年)。一九五〇年の翻訳とは訳文が多少異なるが、本稿ではその詳細についての指摘はしない。

3 A bomb fell on Hiroshima (1:1, p.7) 以下、参考のため注(1)で示した一九四六年七刷版から英語の原文を引用するが、この箇所に関して言えば、翻訳の「忘れはすまい」に該当する言葉は「一九四六年七刷版にはない」。

4 The bomb that fell on Hiroshima fell on America too. (1:3, p.9)

5 It dropped on people. / It did not dissolve their bodies, / But it dissolved something vitally important to the greatest of them, and the least / What it dissolved were their links with the past and with the future. (1:4, pp.10-11)

6 Who loosed this terror upon mankind? / We know, and the world knows. / It is America. [...] / America loosed the bomb that killed a hundred thousand people in Hiroshima and shook the foundations of the world. (1:6, p.12, pp.13-14)

7 "I have given you a soul," cried the Lord, "and you ask Me to come down and do a magician's trick! / The people who smashed the atom didn't beg Me to come with a thunderbolt and spit the nucleus for them. / They knew that there is power in the atom and they set to work to release it. / They succeeded, and shook not only New Mexico, they shook the world. /

All they had to do was to get past the electrons, crack the nucleus, and release the power waiting to be used.

"There is power in the human soul," said the Lord. / "When you break through and set it free. / Like the power of the atom. / More powerful than the atom, / It can control the atom, / The only thing in the world that can. / I told you that the atom is the greatest force in the world, save one. / That one is human soul.

"But," said the Lord — and the stars in the sky seemed to stand still and listen — / "The power must be released, as the atom-breakers released the power of the atom. / They had to get past the electrons to get at the energy packed in the nucleus. / And I have to get past a deal of ego to release the power that is packed in the soul of man. [...]" (2:1, pp.38-39) なお、訳文中には「原爆を破壊した連中」とあるが、原文の該当箇所は“the atom-breakers”なので、本来は「原子(核)を破壊した連中」と訳すべきであろう。

8 一九四六年七刷版に該当箇所はない。

9 矢澤修次郎「MRA運動」、『日本大百科全書(ニッポニカ)』電子版、小学館、二〇〇一〜二〇一五年 (JapanKnowledge.jp) で検索。
<http://japanknowledge.com/ib/display/?id=1001000033107> 最終閲覧：二〇一六年六月(三日)。なお、本稿の書式に合わせて数字は漢数字に直した。

10 宮本百合子「再武装するのは何か——MRAについて」、初出：宮本百合子『平和をわれらに』(宮本百合子文庫)岩崎書店、一九五一年、定本：『宮本百合子全集』第一六巻、新日本出版社、一九八〇年、四二六〜四二九頁。

11 Daniel Sack, *Moral Re-Armament: The Reinventions of an American Religious Movement* (New York: Palgrave Macmillan, 2009) にはカト

からの記述がある。"MRA put a lot of energy into Asia as well. Kensuke Horinouchi, who had met MRA in Washington before the war, led a Japanese delegation to Caux in 1948. He offered apologies on behalf of the delegation and all Japanese people for all the wrong they had done. The summer of 1950 saw the grandly named "Japanese Ideological Mission to the World Assembly for Moral Re-Armament and the Western Democracies." The 74-member group included parliamentarians, mayors of cities including Hiroshima and Nagasaki, labor and industrial leaders, and young people. They visited Caux and other sites in Europe, as well as New York, Washington, Mackinac, and California." (p.154) (筆者(齋藤)注: Caux はスイスのMRA本部があった場所。)

12 入江訳に掲載された「献辞」を引用しておく。「ますます強力な、いよいよ説得力のあるイデオロギーを掲げて、好戦的な物質万能主義の勢力に拮抗する、フランク・N・D・ブックマンに捧ぐ」(「第一部」の直前、ノンブルなし)。なお、一九四六年七刷版の"ACKNOWLEDGEMENT"(PART Iの直前の頁に掲載された)も参考までに全部引用する。"Since "The Bomb That Fell on America" was first published, the author has had occasion to learn that words of praise, generally the most edible of manna, may stick in the throat, and burn. For he has been given credit for certain insights which he was able to draw from subterranean springs only because of the bucket put in his hands by Dorothea and Eric Parfitt, Alan Thornhill, Andrew Strang, "Bunny" Austin, Mary Hagedorn, and other friends, working for Moral Re-Armament here, there and elsewhere. He is glad of the chance to say how much he owes these spurs of God in the flanks of a torpid world.

/ What he owes his wife and some of her friends runs all the way from fundamental conceptions of Deity to so mundane but useful a matter as gathering a first audience for a poem in which they believed." (下線は筆者(齋藤)によるもの。)以上二つの引用から、この作品がMRAの思想に影響されていることは明白である。

13 ただし、下巻は、私の調査した限りでは日本国内の図書館に収蔵されていない。また、筑波大学中央図書館レファレンスコーナーに依頼した追加調査の結果を踏まえると、下巻は実際には出版されていない可能性が高いと、筆者(齋藤)は推測している。

14 日本国内の図書館には上巻と中巻は収蔵されているが、下巻は見当たらない。これも注(13)と同様の経緯で、下巻は出版されずに終わった可能性が高いと推測している。

15 ハーマン・ハーゲドーン『アメリカ人物誌』、四〇五頁。なお、同じ文章が『アメリカ人群像』上巻と中巻の四〇五頁に、あたかもテンプレートのように、掲載されている。

付記

本稿は国際学会「核・原爆と表象／文学——原爆文学の彼方へ——」(主催: 科学研究費(基盤B)「核・原爆と表象／文学に関する総合的研究」(代表: 川口隆行)、原爆文学研究会(第四九回例会)、於: 九州大学西新プラザ大会議室、二〇一五年二月一二日・一三日)における発表原稿(タイトルは本稿と同じ)に必要最少限の加筆修正と注を付けたものである。発表当日(一二日)にご教示くださった方々に感謝申し上げます。また、本稿は、国際会議を主催した科学研究費(二六二八四〇三八)の研究成果の一部である。